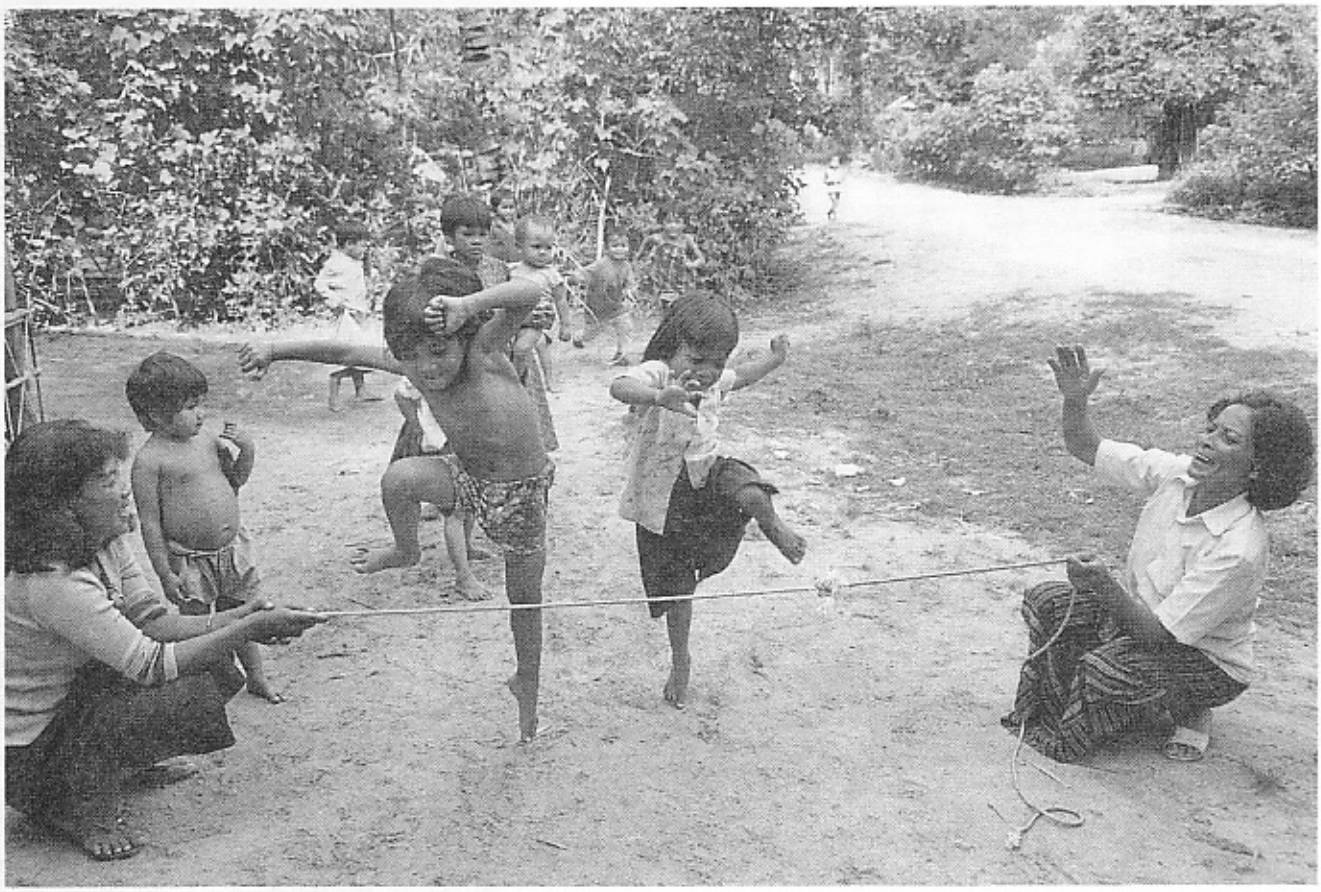
Children, Our Future

CYR
CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会

子どもたちの明日



ＣＹＲ保育所の子どもたち（カンボジア）
Children at CYR Child Care Center (Cambodia)

CYR News ニュース No.34 1994年8月

1994年度 総会報告 …… 2
CYR's 14th Annual Meeting

座談会 "ボランティア" を話そう！ …… 3
Round Table Talk: Let's discuss "Volunteers"

近況インタビュー …… 6
Interview

CYR海外プロジェクト短期研修 …… 7
CYR's Short Term Training for Volunteers

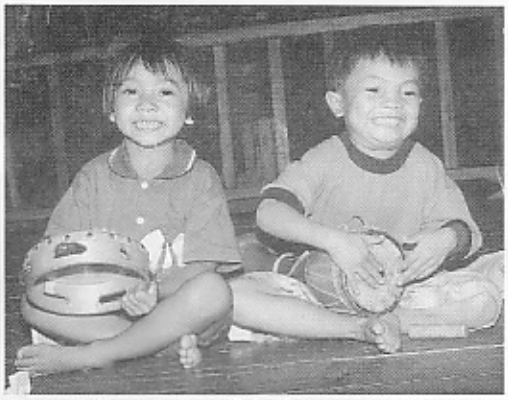
タイ料理を味わおう！ …… 9
Let's Taste Thai Dishes !

しくろ通信 …… 10
Cyclo News

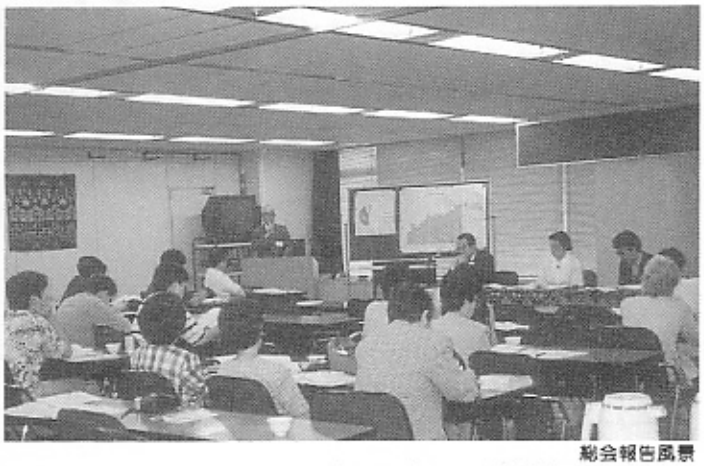
最新情報 …… 11
Latest Developments

- 『育つ難民の子たち』ＣＹＲ三冊目の育児書
  The Third Book on Child Care Published by CYR
- 郵政省国際ボランティア貯金助成決定
  CYR To Receive Grant from Japanese Ministry of Posts and Telecommunications

表紙写真：小林正典　Cover Photo : Masanori Kobayashi



楽器で遊ぶ子ども（タイ保育所）
Children Playing with Musical Instruments
（Child Care Center, Thailand）



総会報告風景
Presentations at CYR Annual Meeting

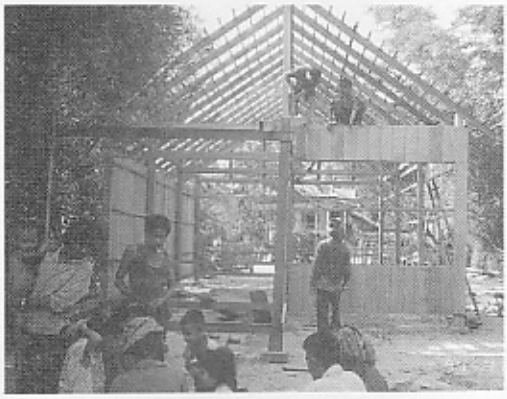
1994年度 総会報告

6月12日（日）、CYR第14回定期総会が東京都社会福祉総合センターにおいて、出席者37名、委任状提出者245名の計282名で開催されました。カンボジア、タイ、日本での1993年度事業報告および1994年度事業計画、1993年度収支決算および1994年度予算が決定されました。

また、CYRの活動を継続し、財政の安定を図るため、活動の主体である会員を増やし、会費を増額することが検討されました。会費については現在の正会員費、年六千円を年一万円に、また賛助会員の団体会員費を、新たに年三万円とする案が執行部より提出され、総会の承認を得ました。

役員改選では、新理事11名、監事2名が選任され、代表に深水正勝、事務局担当理事に笹尾勝が就任いたしました。

（「年次報告書1994」参照）



村人の手による保育所建設（カンボジア）
Villagers Help with Building of Child Care Center
（Cambodia）

保育者養成風景
Training of Child Minders （Cambodia）

CYR's 14th Annual Meeting

On June 12, 1994 (Sun) CYR's 14th Annual Meeting was held in Tokyo attended by 282; 37 in person and 245 by proxy. The agenda included reports for 1993, plans for 1994 on activities in Cambodia, Thailand and Japan, financial statements for 1993, and budget for 1994. The agenda was approved.

The meeting deliberated proposed increases in membership and fees in order to continue support for CYR activities and stabilize its finance. The executive committee proposed an increase of the annual fee for members to ¥10,000 from ¥6,000, and to set the fee for corporate benefactors to ¥30,000. The proposal was approved by the floor.

11 new directors and 2 auditors were appointed; Mr. Masakatsu Fukamizu was appointed as the representative and Mr. Masaru Sasao as the director in charge of the secretariat.

“ボランティア”を話そう！

（1994年6月25日　於ＣＹＲ事務局）
岡　浩幸
佐藤　里佳子
加藤　真一

ＣＹＲにとって、”ボランティア“は強力な仲間。”自発的“に集まって来る彼ら。今まで話し合ったことのなかった”ボランティア“の自分を語る。

なぜボランティアを？

――まず始めに、なぜボランティアの仕事をしようと思ったのですか。

加藤　やろうとしたのは単純な動機で、暇だったので何か探そうと、雑誌でＣＹＲを知って、これならできることがあるだろうとやってみたのが正直なところ。自分の仕事とは違う分野だから、別の情報が得られるという期待感はありましたね。何かやろうと思っても、すぐに海外へ行って仕事をバリバリやれるわけでもないし、できることから始めようとしたんです。

岡　僕の場合、きっかけはＣＹＲのタイ・スタディツアーです。僕は、社会福祉団体で働いていますが、アジア5か国から研修生が来ています。彼らが国でどういう仕事をしているか、どういう生活をしているかを知りたくてツアーに行きました。

佐藤　私は学生ですが、加藤さんとは正反対なんです。自分でも意気込んじゃっていけないなと思うんですが。小学校2年生の時、テレビでインドシナ難民の子どもを救おうという番組をやってたんです。初めてだったんです、そういう映像を見たのが。すごいショッキングだったんです。

「募金をしないといけないわ」と母が言い、けれど募金するのを忘れて、ずっと心に残っていたんです。幸せな子ども時代を過ごすことができない子どもをつくってはいけないと、何かしなきゃと思っていました。

――何かしなくてはという素朴な気持ちがもとにあるのは、みなさん共通していますか。

岡　スタディツアーで出会った子どもたちのために、日本に帰ったら何かをしたいと思いました。どうしたら問題が解決できるかはわかりませんが、ＣＹＲに来てお手伝いをしているうちに何か見つかるのではないかと思っています。

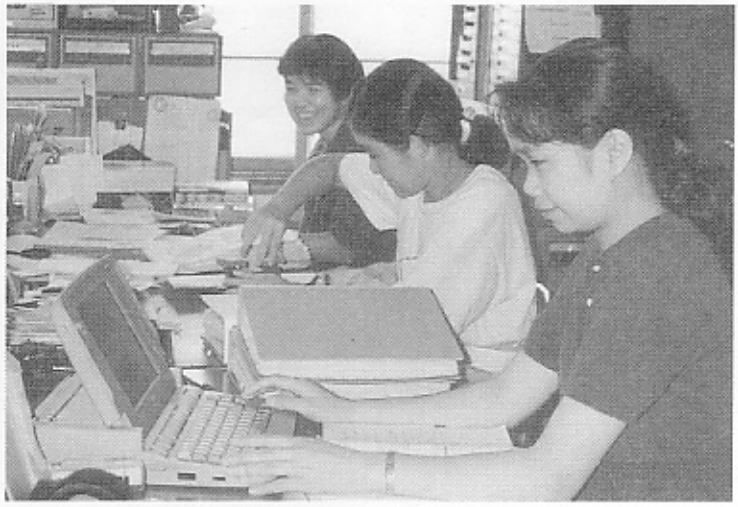
責任を楽しんでいる自分

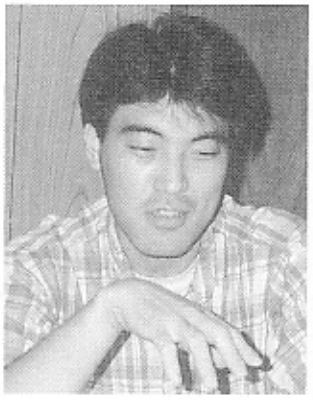
――ボランティアを続けている支えは何でしょうか。

佐藤　私は学生なので社会的責任を感じる場所がありませんでした。けれどここでは他の人たちとの連携で、私はこの仕事を任されているという責任を楽しんでいます。お金をもらって果たすのとは違う、人間と人間どうしの責任が感じられる唯一の場所です。

加藤　仕事の他に有意義なことをして、精神的なバランスを取りたいんです。

岡　会社にはないものが得られたり、人間関係も自分で広げることができますよね。それにつまらなかったら来ません。自分でやることを、誰に指示されることなく見つけて、楽しみを得ることができます。





加藤　ボランティアが人のネットワークの場として広げられているので、すんなり何かをしやすいのが嬉しいです。一緒に来てやりましょうよ、と言ってくれるので参加しやすいんです。そういう場は他にありそうでないですからね。

佐藤　自分が何をしたいのか、何を求めているかを探しながら来る人がいて、受け入れる側もやりましょうよ、という感じがあるから、みんな続けているのではないでしょうか。

岡　ボランティアをしていてすぐに得するわけではないですが、これがいずれはいいことにつながるのではないかと長い目で見て、究極は自分のためになると考えています。

今思うのは、自分が良かれと思ってやっていることが、ほんとうにいいことなのかと。「ボランティアをする」というのが目的になって、その先が見えてこないことがあります。

周りの人たちの反応は？

——追求していくと自己満足かもしれませんね。自分がやるから、充足感を得るのも自分ですし。

ボランティアを周りの人はどういう目で見ていますか。

岡　友だちは「お前は会社に入って変わった、怪しいことをやっているんじゃないか」という反応です。（笑）親には恥ずかしいから話していません。

加藤　自分からあまり人に言っていません。酒を飲んだ時に話すと、「偉いね」と言われます。自分はなかなかできないという人が多いですね。家族には話しますが、良くわかっていないみたいです。

佐藤　私の家族は理解があって、始めるのはいいけれど、野次馬で終わるのは止めなさいよと言われました。

友だちには言わないんです。恥ずかしくて。以前友だちに、なぜそういうことをやっているのと突き詰められて、私もなぜだろうと思って、結局あなたたちには理解できないでしょうけどと、けんかになっちゃったんです。自分がどうしてボランティアをやっているのか、うまく表現できないだけに、周りに「流行りだからね」と、一言でいわれるのが嫌で、周りの反応を聞くのが恐いので話さないんです。

ボランティアへの偏見？

——誰も悪いこととは思っていませんが、素晴らしいわね、がんばりなさいというムードがあるかというとそうではないですね。特殊な目で見られるというのはありますか。

佐藤　言わないというのは、自分も自分に対して偏見があるんです。私はCYRでタイ料理会を企画して、友だちを誘った時、「ちょっと変わっていると思うでしょ」と言って、前置きをして、「いや、そういうふうには思わないけれど」と言われて。そういう自分も嫌だったんです。変わっているって自分から言ううちは、周りの偏見も取れないし、偉いねという反応が出るうちはまだまだだと思うんです。それが普通だと思う社会でないといけないんです。

——なぜ偏見があるのか、何に対する偏見なのでしょうか。

加藤　日本人の村社会的な考え方、みんなで輪を作って、派手なことをしないで調和をとってということでしょうか。

岡　僕らが活動をしていて、偉いねと言われるうちはいいんですが、寄付をくれないかと話すと、相手の顔色が変わって言えない面があります。

加藤　ＣＹＲではＴシャツを販売する係をやっていますが、Ｔシャツを買ってくれないか、と切り出せないんです。お金がかかるよと言った時に、それまではいいねと言っていた人に警戒心が出てきて。このお金がどういう使われ方をするのかがわからない、いい方向に使われていることがはっきり伝えられればいいんですが、そうならないんです。寄付が、タイやカンボジアの保育園に使われていることが、初めて聞く人にすぐ認識できるほど、まだ認知されていませんから。

佐藤　どうやってお金が使われるか、人にわかりやすく伝えるのが、ボランティアの活動の一環でなければいけないと思います。

　私が料理会を開いた時に、「料理会をするお金があるんだったら、どうしてそれを寄付しないの」と友だちから聞かれて返答に困ったんです。これが、タイとカンボジアの子どもたちのためにどう役立つかという広報活動も力を入れていく方がいいと思います。

　ＮＧＯが日本で活動する時は、どれだけこの問題に人々の意識を集められるかを目的としていますよね。私たちが料理会を開いたり、バザーをやったりした時に、お金が集まったから海外に送ればいいと、それだけで終わってはいけないんですね。その先を、人々の意識を集めるために、どうやって動かしていくかをやらないと、ほんとうの活動とは言えないと思います。

ボランティアで得たもの

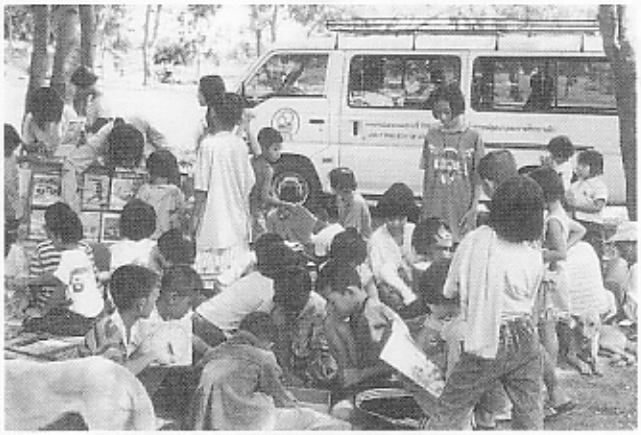
——お金をいただいた方に対して、どういうふうに使ったかを報告する義務が、ＮＧＯにはありますね。

では最後に、ボランティアをやって得たものを一言ずつ聞かせてください。

加藤　以前は、世界の情勢に目が向いていなかったですからね。今は新聞を読むようになりました。得られたものは何かと言うと、そのすべてが目新しいものです。いろいろな知識や情報が、ボランティアから得られるということもわかりました。それに友だちが増えたのも嬉しいですね。

岡　ＣＹＲのスタディツアーで現場を見ることができて、自分が狭い中で生きていたと、こんな世界もあるんだということを知りました。

佐藤　私は何かやらなければいけない、子どもを助けなければいけないという意気込みで入りました。けれどここでいろんな方々と知り合いになれて、それは期待をしていなかったことなので、一緒にやる仲間がいて嬉しいと思いました。そういう方々と話していると、意気込み過ぎていると燃え尽きちゃうよ、というのが感じられて、心にゆとりができました。今までは気ばかり焦っていたんです。いろんな活動をしているうちに自分を見直す機会ができました。



移動図書活動（タイ）
Mobile Library Visits Village （Thailand）

近況インタビュー
Interview

樽沢美幸
Miyuki Tarusawa

現在、タイでCYRのスタッフとして村の人たちと保育や無農薬野菜栽培などの仕事に携わる樽沢美幸に聞いてみた。働きながら今、一番感じていること、これからのことなど‥‥。

——タイで働く樽沢さん自身を支えているのは何ですか。

樽沢　移動図書で村を回って、絵本の箱を開いた瞬間の、子どもの顔ですね。本に吸いついてくるというか、その一瞬をまた見たいと思うんです。そしてもっと大きな支えは、一緒に働いているタイのスタッフです。仲間から学ぶことは多いのですが、彼らも私から何かを感じ取って、お互い交換できるものがあればいいと思います。

——村の子どもたちは、将来何になりたいと思っているんでしょう。

樽沢　男の子は軍人、女の子は先生でしょうか。けれど村には仕事がなく、子どもたちは農業を継ぎます。学歴があっても職業を選べないので、小学校や中学校への進学率も低いのです。

——もし樽沢さんに何でもできるとしたら、どんなことをしたいですか。

樽沢　村に小さな図書館を作って、その脇に外で本が読めるように屋根だけをつけます。私はそこで一日中、子どもたちが来るのをぼーっと待つんです。

——日本にいたら気づかなかったことってありますか。

樽沢　日本では自分と向かい合う機会がありませんでした。けれどタイで半年が経って、外国にいるというより、全身が鏡張りの部屋に入るといった感じです。何か問題が起きたり、つまずいた時、結局行き当たるのは自分なんです。悪い部分も含めて自分がよく見えました。

——ご両親はそんな樽沢さんのことを、どのように見ていらっしゃるんでしょう。

樽沢　父はNGOに関しては理解をしていたようですが、それは他の人がやることで、自分の娘となると話は別だったようです。将来のことも心配だったようですが、もう始めてしまっていることなので、母と遠くから見守ってくれているようです。

——タイでの経験をこれからどのように生かしたいですか。

樽沢　タイのスタッフ、両親、日本の友人が応援してくれ、人はどうしてこんなに優しくなれるんだろうと、思いやりを感じています。最近、「おかげさま」という言葉がやっとわかるようになりました。陰で支えてくれる人がいるから、今の自分がある、今を生かされている自分がいることに気づきました。

いつも考えているのは、自分はアジアの中の一員である、だからできることはきっとある、ということです。どこにいるかではなくて、何をしているかが大事なんです。私は常にアジアを近くに感じていたいんです。

（1994年6月20日）

What is the primary factor which supports you in your work in Thailand?

It is children's faces as I come to the village with the mobile library and open the box of books. Their eyes are glued to the books. I would like to see such expressions on their faces again and again.

The biggest support comes from my Thai colleagues. I have so much to learn from them, and I hope that they can benefit from my presence in return.

How would you like to benefit from your experience in Thailand?

My Thai colleagues, my parents and friends in Japan give their support, and I wonder why people can be so caring and thoughtful. I am beginning to appreciate the real meaning of the phrase "Thanks to you". Because of people supporting me, I am what I am today.

I always think that I am a part of Asia and there must be things that only I can do. The important thing is not where I am, but what I am doing. I would like to feel Asia close to my heart.

ＣＹＲ海外プロジェクト短期研修

（第一回タイ）参加者11人の横顔

8月6日に日本を出発した「海外プロジェクト短期研修」の参加者11名は、
「自己発見への手がかりとしての国際参加プログラム」というテーマを掲げ、9日間の研修を終えて帰ってきた。
今回参加したメンバーの紹介と、まず彼らがどんな思いを抱いてタイへ旅立ったかを伝えます。

①氏名
②性別
③生年月日
④居住地
⑤職業
⑥何をしたいか

①小池敏朗
②男
③1942・8・16
④兵庫県
⑤自営業
⑥ビデオを撮り村の人に見せたい。

①築地和子
②女
③1970・10・13
④静岡県
⑤保母
⑥自分にできることを見つけたい。

①青野徳子
②女
③1945・6・24
④北海道
⑤幼稚園教諭
⑥歌う、料理、遊ぶ、何でも。

①後藤今日子
②女
③1964・7・3
④東京都
⑤会社員
⑥ＣＹＲの現地の活動を知りたい。

①築地紀子
②女
③1973・6・26
④埼玉県
⑤学生
⑥子どもたちの生活が知りたい。

①岩佐桂子
②女
③1972・4・26
④東京都
⑤学生
⑥タイ語を積極的に学んで来ます。

①近藤健二
②男
③1962・7・10
④東京都
⑤教師
⑥村の生活は何でも体験したい。

①西澤豊
②男
③1954・3・16
④京都府
⑤自営業
⑥農作業や子どもたちの食事作り。

①久保美希子
②女
③1970・12・24
④東京都
⑤学生
⑥子どもたちと楽しい時を過ごす。

①佐藤里佳子
②女
③1971・3・18
④東京都
⑤学生
⑥日本のゲームで一緒に遊びたい。

①森谷一弓
②男
③1972・2・5
④千葉県
⑤会社員
⑥自分を変える勇気を持ちたい。

日本を別の視点で見たい

森谷一弓

今年大学を卒業し、社会人1年目、青果市場で働いています。大学時代の4年間、子どもたちの社会活動や交流、意識開発を目的としたボランティア活動をしていました。今の日本はあまりにも物が豊かなせいか、人間の心が冷たく感じられます。市場でも新鮮な果物や野菜を毎日捨てています。子どもたちは小学校の高学年になると、夢もなく将来はサラリーマンになりたいと多くの男子が答えます。情報、知識をたくさん頭につめ込み、心と体のバランスがとれていない日本の子どもたち。自分が親になった時、子どもをどう教えていけばいいのだろうかと思います。

昨年中国に行った時、貧富の差は感じましたが、純粋な子どもたちに出会うことができました。もう一度、日本を外から別の視点で見たいと思います。今度はもっと農村に行きたいと思っています。日本で自分の感覚が正しくありたいと、私たちの社会がどれほど豊かで感謝しなければならないのかを、もう一度認識したいのです。

Kazuyumi Moriya

Following graduation from university, I am now working in the wholesale market. I was engaged in social work and awareness development of children as a volunteer for four years while attending university.

Perhaps because Japan is so affluent, I feel people are cold-hearted. Fresh fruits and vegetables are being thrown away everyday in the market.

Even when children become 10 or 11, they have no dreams for future. They merely want to become company employees. Their brain is crammed with knowledge and data, and the balance between their mind and the body seems precarious. I wonder what things I can teach when I have my own children.

When I went to China last year, I felt the gap between the rich and the poor, but children were pure. I would like to look at my country from a different angle. Next time, I would like to visit more villages. I hope that what I feel is sound and would like to feel anew how I can be thankful for the affluence in our society.

子どもの教育、権利について自分の目で学びたい

築地和子

養護施設の保母です。虐待、離婚、経済的困難など様々なケースで子どもたちは入所してきます。日本人の父、タイ人の母の子どもが入所しました。父親は放任、日本に疲れた母親は母国へ帰りました。このようなケースも近年増加しているといいます。21世紀を担う子どもたちを、ひとりの人間として育てる責任が、おとなにはあります。母親が子どもを育てられないからと、母親の責任だけを追及することはできません。むしろ、社会的な背景が重要であり、問題であると思います。物質のみ豊かになった日本、精神的には未熟なわれわれというのが現状ではないでしょうか。

タイ人の生活、子どもの教育、権利などを目で見て学びたい。そして、私にできることは何かを発見したいと思います。様々な問題を私ひとりで、一掃することはできませんが、常に自分自身への問題と受け止め、ひとりの人間としてできることは何かを考えていきます。これは、私自身の本当の生きる意味を見つけ出すこと、自分の発見でもあると思います。

Kazuko Tsukiji

I work at a children's home and look after children who are abused or whose parents are divorced or destitute. Recently a child came to us whose Japanese father did not care about the child and Thai mother went home claiming that she was fed up with Japan. We have an increasing number of such children recently. Adults are responsible for raising children to support the 21st century.

We cannot blame mother alone if a child does not grow up properly. We should look at the problems in background. Japan may be materially affluent, but it is immature in mind.

I would like to look and learn with my own eyes the life of people, education and rights of children in Thailand, and find out things which I can do. I cannot resolve all the problems on my own, but I can always think of them as my own problems and what I can do about them as a fellow being. This is to find the real meaning of my own life and myself.

タイ料理を味わおう！

カーオ・パット・サパロッ ข้าวผัดสับปะรด

（パイナップル・チャーハン）

6月18日（土）東京都牛込簞笥区民センターにて、"CYRタイ料理会"が催されました。梅雨時にもかかわらず、当日はよく晴れ、参加者は20人を上回りました。ボランティアとして、この料理会の世話にあたった佐藤里佳子さんが報告します。

今回の料理会は、相変わらず不人気なタイ米を話題にした。"いかにおいしく"といった講習会に終わらせず、米を生産するタイの農民の様子や、農村が抱えるさまざまな問題点についても考えた。昨年、日本への輸出が始まってから、タイの人々の生活に起きた変化などは、米の味を通して社会に目を向ける機会となった。

料理会といっても、講師はいない。スタッフ、ボランティア、集った人たちが、初めて目にするタイ産の食品や材料を使って、5種類のメニューを作った。タイ米を用いたものは、パイナップルチャーハンとグリーンカレーの2食。チャーハンは、タイ米のパサパサぶりを最もおいしく披露できる料理で、参加者は「こんな食べ方もあるの？」と、新しい味の発見を楽しんでいた。タイ風に、ゆでこぼして炊かれたご飯は、いわゆる臭みもなく、参加した主婦の方々も満足の様子で、極辛のグリーンカレーと一緒においしそうに口に運んでいた。会も終わりに近づき、スタッフによるタイ農村での稲作の様子が説明されると、全員が、今まで目を向けることのなかったタイ米の背景に熱心に耳を傾けていた。

今回の料理会で、私たちはその国々が持つ独特な食文化の違いを実際に経験し、それを尊重することがいかに大切であるかを学んだ。寿司にはタイ米は合わない。タイ風チャーハンには日本米はまずい。今まで一方的にタイ米を避けてきた私たちは、この日、こんな単純なことにようやく気づいたのです。

材料（4～5人分）

エビまたはイカ	100g
豚肉または鶏肉	100g
卵	1個
パイナップル	1/2個
干しブドウ	20g
玉ねぎ	1/2個
ピーマン	1/2個
ごはん	3カップ
万能ねぎ、パクチー（コリアンダー）	各少々
ニンニク	少々

調味料（ナムプラー、塩、コショー）、サラダ油

作り方

1 エビは背わたを取り、豚肉は細切りにする。

2 パイナップルは1cmの角切りにする。
ニンニクはみじん切りにし、玉ねぎ、ピーマンは千切り、またはみじん切りにする。

3 干しブドウは水でもどし、卵はいり卵にする。

4 フライパンにサラダ油を熱し、ニンニクが色づくまで炒め、豚肉、玉ねぎを加え、さらにエビ、ピーマン、パイナップル、干しブドウ、ごはんの順に炒め、最後に卵を入れてまぜる。

5 ナムプラー、塩、コショーで味を整える。
でき上がりに万能ねぎとパクチーを散らす。

つぶし鉢を使ってのカレー作り
Preparing Curry in a Mixing Bowl

Let's Taste Thai Dishes !

CYR's Thai Cooking Class was attended by staff, volunteers and friends. Novel materials from Thailand were used in preparing five dishes. Thai rice was used for "pineapple fried rice" and" green curry". The fried rice was most appropriate for serving with Thai dish and participants were delighted to find new ways of cooking rice. They enjoyed it with very hot green curry. Rice was prepared in Thai way by cooking it first in boiling water, and then discarding the water. Toward the end of the class, CYR staff explained how rice was grown in Thai villages and audience enjoyed learning about the background to which they had not paid much attention previously. Participants experienced the actual differences of culinary culture that are unique to each country and how important it was to respect such differences. Many realized for the first time the simple fact that "Thai style fried rice" prepared using Japanese rice was not delicious, just as Thai rice did not go well with Sushi.

しくろ通信

カンボジア・プノンペン発　CYR　野村美知子
"しくろ"（カンボジア版人力車）に乗せて送る、
手描きの生活スケッチ。

雨季が始まった。
去年より早いようだ。雨がたくさん降って　たくさんお米の収穫がありますように。

プノンペンの街で　雨が降り始める。車やモートーのいそぐ音。
少したつと。こどもたちの歓声がきこえて来る。　ほら。あちこちの屋上から――、
雨の中を走りまわる。たまった水にすべりこむ。
もう　たっぷりぬれているのに　水をかけ合って遊ぶ。ヨチヨチ歩きの子まで丸裸で。
あら。カサを持っている子がいる。
（2年前には　こども用のカサなど見かけなかったのに。）
そうそう。逆さに持って　雨をためるのよ。
そして　誰かにかけてやれ！
ここでは"雨にぬれること"は。楽しいことなのだ。
とめるおとなはいない。

ほんとは
パンツなんか
はいてないのです。

村では　もっとダイナミック。草を食べに出されていた牛達は。とまどっているのに――。
どしゃぶりの雨の中のすべり台。着地のたびに　水しぶきがあがる。
ブランコなんか。もうこたえられない。最高で！　たまった水を足やお尻できっていくんだから。
ただゆれながら雨の音に負けない声で歌うのもいい気分――。
さすがに長く遊びすぎて　くちびるを青くしてかけもどって来た体を保母さんに
ふいてもらう。クロマーにくるまって　それでも外を見ている。
そうだ。次は。寒くならないうちに一度部屋に入って休んで。また行けばいいんだ。
そんと。はじめから服を脱いで行けばいいんだ。そしたら乾いた服を着られる。

私達の国では。"ぬれないように"暮すようになる。
"よしあし"ではないのだ。これは"違い"なのだ
デモ　ワタシモ　一度　オシッデ　水ヲ　切ッテ　ブランコニ　ノッテミタイ!!

雨があがった街では。水たまりで　モートーやシクロの洗車がはじまる。
緑を増したやしの木や。橙色の瓦屋根が青空に映える。
今日は。気持のよい夕方になるね。

カンボジアの村から

最新情報
Latest Developments

『育つ難民の子たち―アジアでの試み』
CYR三冊目の育児書

『育つ難民の子たち―アジアでの試み』は、オランダのバーナード・ファンリア財団の援助を受け、CYRがまとめた三冊目の育児書です。

『保育の手引き』（1981年）、『育児と健康』（同年）に続く今回の『育つ難民の子たち』は、CYRが1980年から13年間行なってきた保育と保育者養成活動の総決算と言えるものです。

難民キャンプにあって、保育者、親、地域の人たちが、暮らしの中でどのように幼い子どもの健康な成長を手助けしていったらよいかに応えたものです。キャンプの子どもたちの写真や、難民の人たちが描いたイラストを用い、具体的にわかりやすい言葉で説明しています。内容は次の通りです。

第一部
遊びを通して子どもたちがどのように学び、精神的、身体的、社会的に成長するか。

第二部
栄養、身体、環境の清潔、病気やけがの予防、応急処置など。キャンプや、恵まれない生活環境にある子どもの健康、安全への配慮。

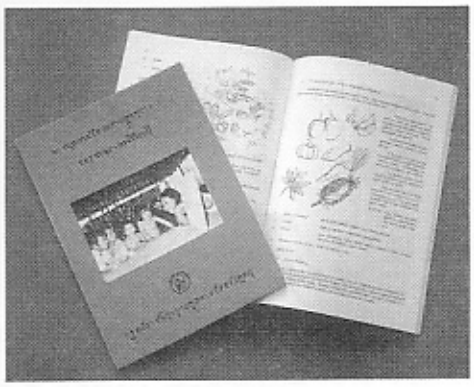
第三部
キャンプの保育園で開発された遊具や教材、身近な素材で簡単にできる「遊び道具」の作り方や遊び方。

教育を受ける機会を奪われて難民になった保育者や家族は、このハンドブックから、幼い子どもの何気ない遊びに目を向け、それが子どもの健全な発達にどう影響しているかを学びます。さらに大人の愛情深い配慮が、深刻な状況では一層大切であることを伝えています。

この本は、すでにカンボジアの村々で役立てられているように、将来も恵まれない環境の子どもたちを健やかに育てる手がかりになるでしょう。

なお、このハンドブック（英語版とカンボジア語版のみ）をご希望の方は、CYR事務局までお申し込みください。

代金1000円・送料270円



"Developing Refugee Children: An Example From Asia"

The third book on child care published by CYR

"Developing Refugee Children: An Example From Asia" is the third book on child care published by CYR under the grant from Bernard van Leer Foundation.

The handbook published in Cambodian and English languages is the fruit of CYR's 13 years in child care activities and training of child minders which took root in communities.

CYR answered questions asked by child carers and parents in refugee camps and by community people about what they should do to help with healthy growth of children. The book contains many photos and illustrations drawn by refugees accompanied by texts in easy-to-understand words. Child carers and adults who have been deprived of their opportunities for education will learn a great many lessons from the Handbook and how simple plays of children can help their healthy growth. The book tells them how loving care given by the adults is crucial in inferior situations.

The book is already being used in Cambodian villages, and we hope that it will help children of tomorrow living in harsh environment.

郵政省国際ボランティア貯金助成決定

1994年度郵政省国際ボランティア貯金より、CYRの事業に対する助成が認められました。助成金は、以下の事業内容に有効に使われます。

助成対象	助成金額	事業内容
カンボジア	9,959,000円	保育所の運営、家庭相談員・保育者の育成、住民に対する巡回診療・保健衛生指導、縫製技術指導
タイ	9,632,000円	保育所の運営、保育者の育成、野菜・果樹栽培・有機農業・養魚技術指導、移動図書館の運営

国際社会のかけ橋をめざして

CYR—a Bridge to the Global Community

「幼い難民を考える会」は、難民になったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、14年前に組織されました。緊急援助のさなか、子どもたちが安全で安心できる場所をカンボジアの人たちとつくりながら、相手の自立を侵したり、管理する態勢に陥らないようにすることも学びました。

「難民の子ども」ではなく、人格をもった「幼い難民」として保育を受けた子どもたち7833人（1980年6月〜1992年11月）も、カンボジアを含むさまざまな国で新しい人生を歩んでいます。

CYRの活動は難民救済から新しい段階に入り、小規模の地域開発を手がけるまでになりました。タイの国境の村とカンボジアの村で、「考える会」が行なっているのは、難民の問題に影響を受けた地域の人びとの自助努力を支えることです。これは試みとしては小さなものに過ぎません。

しかし日本とタイ、そしてカンボジアを結ぶ国の交流は、日本に求められている国際社会での役割について、たくさんの示唆を与えてくれます。

難民の問題に学び、これを出発点として、地域の人びとを知り、よりよい暮らしをめざしています。それは人びとが再び難民にならない、安定した社会をつくる道につながるからです。

"Caring for Young Refugees" was established 14 years ago to assist the Cambodian refugee children in a refugee camp. The children were then the source of our aspirations to be better members of the world community. We learned to care and respect each other as we lived with them.

The young refugees who attended CYR's Child Care Centers counted 7,833 since 1980 until the closure of the camp in 1992.

Although in a small scale, CYR now operates in two countries; Thailand and Cambodia continuing to focus on a developmental work where spirit of self-help is essential, but where children and women are much in need of support for their well-being. CYR's aim is to encourage people to live with integrity and in harmony.

幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES
〒160 東京都新宿区南元町6－2
☎03-3353-9947 Fax 03-3353-9739
Head Office:6-2, Minamimotomachi, Shinjuku-ku, Tokyo 160, Japan
Bangkok:V.V.V.Apt.23,135 Soi Phayanak, Phayathai, Bangkok, Thailand
☎ 215-0658
Phnom Penh:No.43 St. 306 Sangkat Beung Keng Kong, Khan Chamkar Mon Phnom Penh, Cambodia
☎ 18-810261

発行人■Publisher
深水 正勝 Masakatsu Fukamizu
編集責任者■Editorial Director
笹尾 勝 Masaru Sasao
翻訳■Translation
大井 幸子 Sachiko Ohi
DTPデザイン入力■DTP Layout
亀田 万里 Mari Kameda
印刷■Printed in Japan
小田切印刷 by Odagiri Printing Co.,Ltd.

切り取り線

申込書 CYRへあなたのご支援をお寄せください

申込日　　年　　月　　日

お名前　　男・女

ご住所 〒

☎

勤務先/学校名

（入会希望の方）

■ 会員になり、活動を支援します。

正会員費 年10,000円（　年　月〜　年　月）

団体会員費 年30,000円（　年　月〜　年　月）

（寄付の方）

■ 活動支援のためのご寄付は、払込用紙に「寄付」と明記の上、ご送金ください。

※会費／寄付の方共にご送金とは別に、この用紙を切り取って事務局宛にお送りください。

会費／寄付金の振込先　① 郵便振替　口座番号　00110-8-36227

（払込方法に○印をおつけください）② 銀行振込　第一勧業銀行　広尾支店　普通 057-1280817